

解説

附属高等学校 1 年 保健

タイトル：保健の授業で育成される資質・能力に関する一考察—生徒の自覚するエージェンシーについて—

授業者：丸山実花 教諭

解説タイトル：

保健科教育におけるエージェンシーの自覚と育成 — 高校生の自由記述分析から

コンピテンシー育成開発研究所

特任助教 押尾 恵吾

「保健の授業で育成される資質・能力に関する一考察—生徒の自覚するエージェンシーについて—」は、高等学校の保健科における授業を通して、生徒がどのように「エージェンシー」を自覚し、育んでいるかを明らかにした調査の報告である。エージェンシーとは、社会に変革を起こす力、社会の一員として、社会がより良くなるよう考え行動していくことを指す。調査の目的は、生徒自身が保健の授業を通して獲得したと認識するエージェンシーを把握し、具体的な育成のあり方を検討することであった。

調査は 2023 年 3 月と 2024 年 3 月に実施され、それぞれ高校 1 年生女子 126 名と 108 名、計 234 名を対象とした。方法は、1 年間の保健授業を振り返り、身についたことや意識したことをお茶の水女子大学が定めた「お茶大コンピテンシー 10」の定義に基づいて、調査参加者に自由記述を求める質問紙調査であった。テキスト分析ソフトである KH Coder を用いて、記述内容は分析され、共起ネットワークや抽出語、クラスターなどの視覚化を通じて生徒の意識構造が明らかにされた。結果として、125 名の生徒によるエージェンシーに関連する記述がみられた。その内容は「授業で学んだ知識を社会課題と結びつけて考える」「精神疾患や薬物依存への理解を深め、偏見をなくしたい」「他者の発表を聞いて、自分にできることを考え実行しようとした」などであり、学んだ知識を自分や仲間、さらに社会にどう活かすかを真剣に模索している様子がうかがえた。また「小さなことでも実際にやってみようと思った」「視野が広がり、身近な環境に目を向けるようになった」といった言葉から、行動の変容や意識の拡張といった内面的な変化も確認された。さらに、発表やスピーチを通じて「聞き手にどう影響を与えるか」を考える姿勢も表れており、学習を社会的実践へと接続しようとする傾向が強調された。

このように、生徒たちは保健の授業を通じて、単に知識を獲得するだけでなく、その知識を生活や社会に結びつけ、改善や変革を志向する主体的な態度を培っていることが示された。特に「正しい知識を得る」「複数の視点を持つ」「自分から行動する」といった要素が頻出し、エージェンシー

の具体的な姿として浮かび上がっている。また、全員が必ずしも直接的な行動に移すわけではなく、「自己の意識変化」そのものをエージェンシーと捉える傾向も見られた。

本研究では、探究的な学習の枠組みがエージェンシーの育成に有効である可能性が指摘された。生徒が身近な課題や社会問題を自分ごととして考え、仲間と議論し、言語化して共有する過程は、主体的に生きるための基盤を養うことにつながる。一方で、こうした学習が効果を持つためには、教師による的確な手立てや支援が不可欠であるとも結論づけられている。本調査報告から、保健科教育におけるエージェンシー育成は、生徒の自覚を基盤としつつ、探究的活動と教師の支援を組み合わせる進めることが重要だと考えられる。